

## 満たす、五感をもこえて

横浜市立小田中学校三年（神奈川県）

## 大塚 菜々陽

茶道には、私たちの五感すべてを満たす力がある。力強く生きる花の姿や抹茶の泡のきめこまやかさは目で感じ、静かな和室に響く鳥の声や畳のこすれる音は耳を癒やす。花、いぐさ、抹茶…和室にあるものからは、どれも懐かしい香りがするし、少しの緊張感と和やかさのまじった独特の空気が肌を包む。そして、舌で感じる抹茶の味は、あたたかくて、どこか不思議と懐かしくて、心をほっと落ち着かせてくれる。私はそんな茶道の力を、稽古をするたび「好きだな」と感じる。

私は小さな頃から目立ちたがり屋だった。小学校の授業で少し難しい問題が出されたときは、絶対に自分が答えなければ気が済まなかったし、目立つ役職に就いて前に出たがったりしていた。よく言えば「積極的」、悪く言えば「でしゃばり」な人間だった。そのうち私は、「目立ちたい」という考えから「人によく見られたい、すごいと言われたい」

という考えをより強く持つようになった。お点前をするときも「うまくやらなきゃ」という考えが先走ってしまい、無駄に力んだ「硬い」お点前になってしまふことがある。お客様を和やかな気持ちにさせるのが茶道なのに、私の硬すぎるお点前は、お客様が見ていて疲れてしまう。

そんな力んだお点前になってしまいそうな時には、いつもある言葉を思い出す。それは、三年生の先輩方を送り出すお別れ茶会の際に先生から言われた言葉だった。

「茶道は思いやりが大事なのよ」

私たちの茶道部では、コロナウイルス感染症の感染防止のため、しばらくの間、空点前中心の稽古をしている。その日のお別れ茶会でも、誰かが点てたお茶を他の人がいただくということができず、自分の分を自分で点てていただいていた。だから、自分が水屋の仕事をしていた、先生の空になったお茶碗をお下げする時に発せられた「結構なお点前で」という言葉に、うまく返答できなかった。戸惑う私に、先生があの手を掛けてくれたのだ。きつと先生は、美味しいお茶を点てることや、美しい作法でお茶を点てることだけでなく、相手のために茶道の素敵な空間を提供しようとするそのものもひっくり返して「点前」なのだということをお教えてくださったのだ。そして、相手を思う心…思いやりから生まれた行動は、たとえ目立つようなことではなくとも、立派な「点前」として相手に伝わるの

だ。

「思いやりというものは難しい。なぜなら正解がないからだ。人が一人一人違うように、何を幸せと感じるかも一人一人違う。だから、良かれと思ってしたことでも、結果的に人を傷つけてしまうということも日常生活ではおこりうるのだ。そんな、難解な「思いやり」が最も重要となる茶道は、難しい。けれど茶道は「思いやり」の力を鍛える、最高の文化なのだと思う。そして、私達の茶道部は、きつい筋トレも、つらいランニングもしないけれど、「思いやり」について一生懸命考えることのできる場、私の誇りだ。たとえ、正解がなくても、「思いやり」について、人の気持ちについて、考えることにこそ意味がある。そして、そうやって考えることは、自分の心も人の心も豊かにするのだ。茶道には私たちの五感すべてを満たす力がある。でもそれだけではない。五感をこえた、もっと何か、心の真ん中にあるもの：新たなもう一つの「感」をも、満たすのだ。私たちのとても大切なものを満たしてくれる力があるのだ。はるか昔から、色々な人が培ってきた、そんな茶道の不思議で美しい力をこの先も後世に伝えていけるような茶道を、私はしていきたい。